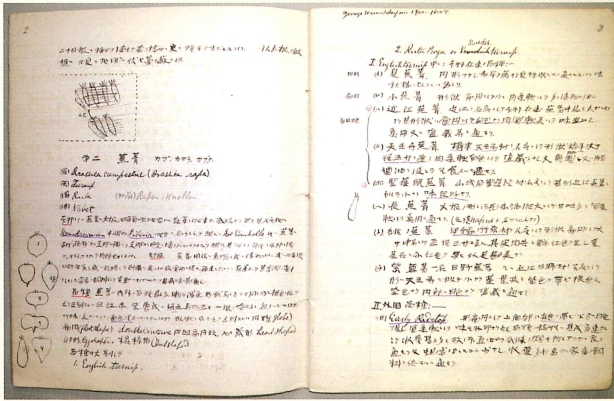


札幌農学校の

「実学」を考える(二)

泥くさいナンバー2、南鷹次郎

大学文書館 井上高聡



南鷹次郎の「園芸学」講義を受講した札幌農学校第14期生平塚直治のノート(大学文書館蔵)

南鷹次郎についてご存じだろうか。四十年近くにわたって校長・学長・総長を務めた佐藤昌介の下、農場長・農学部長としてナンバー2の地位にあり、北大の縁の下を支え続けた人物である。

南は、札幌農学校第二期生として卒業後、一八八三年に札幌農学校教員となった。外国人教師W・P・ブルックスの下で農校園(札幌農学校の農場)の実習助手を担当し、間もなく農校園監督となった。一八八七年には、農校園に附設した農業技術者養成コースである農芸伝習科の主任となった。同時に農学校本科で「日本農学」などの講義を担当した。当時、外国人教師が英語で教授したのは欧米の農学・農業技術などであったが、南はより日本と北海道の風土に適合した農学を講義した。

一八九三年に最後の外国人教師が離任すると、南が農学全般の講義を引き継いで担当した。

教え子たちは、南が北十条付近(現在の文系校舎の東側)にあった農場から、時計台周辺の校舎まで泥まみれ汗だくで講義に駆けつけたこと、講義内容が作物栽培・肥料・土壌・農具・畜産・土地改良にまで及び、教え方も試験問題も具体的・実地的であったことなどを回想している。

農学校教員は着任前後に必ず数年間のアメリカ・ヨーロッパ留学を経験したが、南は農校園経営や北海道内外の農産物品評会・博覧会の仕事から離れられず、渡航機会がかなり遅れた。

南は北海道農業の現場に立ち会い、農産物生産の状況に熟知していた。「北海道園芸業の

沿革(一九一五年)などの論文を著したほか、西洋梨を栽培し始めたところに日本梨と同じように収穫後すぐ食したため、不味いと判断してしまい、豚の飼料にしたなどの失敗エピソードなども語っている。

晩年には佐藤昌介の勇退に伴い第二代北大総長に選出された。大学関係者の誰もが長年に及ぶナンバー2の役割の重さを認識していた証左である。南鷹次郎は、北大の教育と農場経営の現場にあつて、泥にまみれ、長く「実学」を担い続けた。



南鷹次郎(一八九三年、大学文書館蔵)